



カステルサルドの親方作「大天使・聖ミカエル」
(15世紀末)(出典: Robert Muchembled,
Diablot, Seuil: Paris 2002)

◆◆◆悪魔の形状◆◆◆
キリスト教では、悪魔は神に敵対し、人間を誘惑して罪に陥れる存在である。ただし、悪魔が悪行をなすのは神の許可のもとであり、悪魔が神と同等の力をもつのではない。悪魔の力が神の力を凌駕することはない。このことを示す一枚の絵を見てみよう。イタリヤのサルデーニャ島で活躍し、その北岸のカステルサルド大聖堂の絵の作者と推定

されることからカステルサルドの親方といわれている画家が制作した「大天使・聖ミカエル」(二五世紀末)である。悪魔との戦いで神の軍の総帥を務めるミカエルが槍で突き刺そうとしているのが悪魔だ。緑色の皮膚は死体の腐敗色である。角、鋭い牙、猛禽類の足爪のほか、女性的な乳房と男性器を想起させる大きな鼻もついている。人間と動物、男女のハイブリッドだ。角の形状は、羊か山羊か判断に迷うところだが、山羊であろう。なぜなら、山羊鬚や山羊角は悪魔表象の定番だからだ。山羊は繁殖力が高く、性的紊乱と結び付けられ、好色な悪魔が人間と性的な交わりをもつという信仰と関連付けられた。

また新約聖書「マタイによる福音書」二五章にあるように、神は最後の審判ですべての人びとを羊飼いが羊と山羊をわけるようにやりわけ、羊側の人びとには祝福を与えて天国行きを確認する一方、山羊側の人びとには悪魔のために用意している永遠の火のなか、すなわち地獄に墮ちるよう厳しく命じている。山羊は悪魔と地獄に結び付けられる動物なのである。

一五〜一八世紀の西ヨーロッパ社会では魔女狩りがおこなわれ、約五万人が魔女として処刑された。悪魔の手下である魔女が魔術をつかって人畜に病死をもたらしたり、嵐を起すとして穀物に損害を与えたりすると考えられていた。彼らの究極の目的はキリスト教世界



フランチェスコ・マリア・グアッツォ著『魔女要論』
(1608年)より

の転覆であった。当時、魔女や悪魔の悪辣な行為を論じた悪魔学書が多数出版されたが、そこには悪魔や魔女の活動を描いた図像が挿入されているケースがある。バルナバ会修道士フランチェスコ・マリア・グアッツォが著した『魔女要論』(一六〇八年)には、山羊顔で、蝙蝠の羽が生えた人間の身体をもつ悪魔が魔女たちから尻への接吻を受けている版画が掲載されている。

◆◆◆メキシコの悪魔仮面◆◆◆

ところかわって、民博所蔵のメキシコの悪魔の仮面「ディアブロ」を見てみよう。一五二一年にアステカ王国がスペインによって征服され、宣教師によるキリスト教の布教が始まった。その過程で現地に元からあった仮面に角が付けられ悪魔化されたのである。山羊の角かは定かではないが、人面と動物の角のハイブリッドであることは確かだ。

想像界の生物相
ハイブリッドな悪魔

大成学院大学教授 黒川 正剛
くろかわ まさたけ



資料名 | 悪魔仮面「ディアブロ」
標本番号 | H0131791
地域 | メキシコ
サイズ | 高さ 50cm × 幅 25cm × 厚さ 17cm